# 「浪花百景」とメリー・ポピンズ
## 成熟した市民生活は広場から

戦争や感染症、物価高騰などが重くのしかかる現代、平安な日々が戻るよい新年を誰もが願っておられることだろう。

「いちょう並木」の12月と1月は合併号である。「新おおさかKEYわーど」に何を書こうか、毎年迷う。新年の話題を書くと、12月の発行時に読んだ人には年の瀬で忙しいのにと思われるし、年末の話題だと1月に読むと昨年の話になってしまう。テーマを選ぶ上での悩みだが、新年を迎える準備である「ことはじめ」も年末12月に催されている。これと同じと考え、今回は正月にむけての話題として、連作錦絵「浪花百景」より「錦城の馬場」（表紙図）をとりあげよう。錦城は大坂城のことで、金城の字を当てることもある。

「錦城の馬場」の右下を拡大すると、現代の公園のにぎわい。

城の前にある馬場に人が集まっている。大きな日傘を置き、丸に「金」字の幕の内から凧あげをするのは、「こうしてあげるんや」と幼い子に教えているお兄。向こうにも、凧糸を引く大人や凧をもって歩くこどもが描かれる。現代の大阪城公園と変わらない。

イカ焼きとたこ焼きの違いではありませんが、大坂では、「凧（たこ）」のことを「凧（いか）のぼり」と呼んだ。与謝蕪村の有名な句にも「凡巾（いかのぼり）きのふの空のありどころ」がある。「凧」の字を分解して「凡」と「巾」でいかのぼりと読ませるのが印象的だ。また上方落語の「初天神」にも馬場で「凧（いか）」をあげる親子が登場する。新年最初の天満宮の縁日が出る1月25日の話だ。

『摂津名所図会』や『浪華の賑ひ』によると馬場あたりや、近くの「杉山」（現在の大阪城公園の噴水の辺り）もこうした行楽地であった。『浪華の賑ひ』は「杉山」について次の様に記す。

「この地は金城の巽（南東）の方にして杉の大樹繁りし山なり。四面の眺望殊更（ことさら）に風景よきゆゑ、春暖の頃は浪華の貴賤ここに来たつて遊宴す。（中略）」

「梅匂ひ、桃さくころより、都下の老若ここに来りて弁当をひらき、竹筒をかたむけ、謡（うた）ふあり、踊るあり、煎茶をたのしむ老人、凧のぼす小児、春草をつむ婦女子など、おもひおもひに遊興し、紅日西にかたむくををしめり」

この辺りで凧あげが行われ、現代の市民社会にも通じる平和な民衆生活が、すでにそこにはあった。

「錦城の馬場」で思い出すのが、小学生の時、映画館で見たジュリー・アンドリュースが主演したミュージカル映画「メリー・ポピンズ」（1965年日本公開）である。物語は1910年のロンドンが舞台。万事がお金お金で働きづくめの銀行員のお父さんが、子どもたちやメリー・ポピンズのおかげで吹っ切れて明るくなり、ラストシーンで公園に凧あげに行く。みんなで歌うのが「凧をあげよう（Let's Go Fly a Kite）」だ。家族で凧あげをして幸せな気分になる「メリー・ポピンズ」の情景が、洋の東西を越えて「錦城の馬場」に重なってくる。

私にも思い出がある。半世紀ほど昔、「ゲイラカイト」という洋凧がはやった。羽子板や独楽と並んで駄菓子屋で売られていた和凧とは違って高く上がる。高校3年生の正月、茫茫（ぼうぼう）たる空地が広がっていた南港の埋め立て地に、それをあげにいった。寒い寒い日だったが風がなく、カイトもあがらず、風邪をひいて数日寝込んでしまった。

受験目前というのに何をしていたことやら。凧あげで大学にすべりましたと、いまでも言い訳に使わせてもらったりするわけですが、「錦城の馬場」を見るたびに、メリー・ポピンズの歌と半世紀前の南港の光景が重なってよみがえり、少し幸せな気分になるわけです。

『浪華の賑ひ』の「杉山」。城の櫓の近くで野遊びを楽しむ人々。

筆者プロフィール

**橋爪 節也**　はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。